

学生の介護実習に対する想いの分析

— プラスイメージ・マイナスイメージのりんごカードの活用 —

清 水 きわ子
中 山 和 子

要 旨

介護実習は、学生にとり楽しいと同時に苦痛を感じる学習でもある。しかし、実習の中で学生は、喜びや達成感や辛さ、失敗といった様々な想いを抱きながら段階を経て成長している。厚生労働省の指導のもと、介護福祉士養成教育における本学の介護施設実習は、本専攻の開設時より、5段階（計480時間）を位置づけてきた。

本学では平成18年度より、実習の体験場面から、喜びや達成感といったプラスイメージや、辛さや失敗といったマイナスイメージを、りんごの形のカードに記入し「私たちのりんごの木」を作成している。

今回、平成21年度からの新カリキュラムへの変更を機に、3年間（平成18年～20年度）のりんごカードから学生の実習の想いを分析し、介護実習指導教員の役割と指導の在り方につき検討した。その結果、学生の介護実習におけるマイナスイメージは、8カテゴリーと37のサブカテゴリーに、プラスイメージは、7カテゴリーと24のサブカテゴリーに分類できた。また、それらのカテゴリー項目は、青・赤りんご内で相互関係にあり、同時に両方向の相互関係にもあった。そのことから、学生は、常に揺れ動く感情体験を通し段階を経て成長していることが明らかとなった。また、介護実習に対する「コミュニケーション」及び「介護技術」における学生の意識は高く、コミュニケーション向上と介護技術習得の場としての実習の意味が大きかった。

介護実習指導教員の役割としては、教員自身が「学ぶ場としての介護実習」の意味と学生の弱い立場をしっかりと受け止め、学生の想いに傾聴し、気持ちに寄り添い、学生自身が感情体験を自己受容できるようなサポートをしながら、実習施設との橋渡しの役割をすることが重要である。

尚、本研究は、平成22年2月の「第4回長野県高齢者介護福祉サービス研究学会」で発表したものである。

キーワード：介護実習に対する学生の想い りんごカード

プラスイメージ マイナスイメージ 実習指導教員の役割

1. はじめに

介護実習は、学生にとって楽しいと同時に苦痛を感じる学習であることは、本学における各段階での実習後のアンケートや先行研究等でも明らかである。¹⁾ 実習の中で学生は、喜びや達成感や辛さ、失敗といった様々な想いを抱きながら段階を経て成長している。教員には、このような学生の体験や感情をどのように受け止め、次の段階への意欲につなげられるような指導力が求められる。

本学では平成18年度より、実習の体験場面から、喜びや達成感といったプラスイメージや、辛さや失敗といったマイナスイメージをりんごの形のカードに記入し「私たちのりんごの木」を作成している。平成21年度から介護教育カリキュラムが変更され、新たな実習体制のなかでの評価が始まった。そこで3年間（平成18～20年度）のりんごカードをまとめ、学生の実習への想いを分析・検討して、今後の実習指導に活かしたい。

2. 研究目的

- (1) 学生の実習体験の想い（マイナスイメージ・プラスイメージ）を分析する。
- (2) 分析の過程で学生の実習姿勢や意欲に影響する要因を明確にし、実習指導のあり方や教員の役割を検討する。

3. 研究方法

- (1) 調査期間 平成18年5月～平成21年11月
- (2) 調査対象 調査期間中に介護実習（旧カリキュラムの5段階実習）をした学生延べ191名。
- (3) 調査方法 各実習終了直後の授業時、学生に青赤各1枚ずつカードを配布し、記入させたりんごカードを基本データとした。青りんごカード（以下青りんご）には、マイナスイメージ（辛い悲しい・嫌な気持ち・失敗等の否定感情）を、赤りんごカード（以下赤りんご）には、プラスイメージ（喜び・嬉しい・達成感・意欲的になった等の肯定感情）を記載。

(4) 分析方法 青りんご、赤りんご内容をカテゴリー別に分類し、分析した。カテゴリーを考える際、ひとつのりんごに複数の内容が記載されている場合、内容別に分類した。

- ① 青りんごのカテゴリー分類と分析
- ② 赤りんごカテゴリー分類と分析
- ③ 各実習段階別におけるカテゴリー数の傾向からの分析

4. 結果及び考察

得られたデータは、青りんご181、赤りんご274であった。各カテゴリー分類の結果は、表1のとおりである。青りんごは、8カテゴリーと各カテゴリーに内包される37のサブカテゴリーに、赤りんごは、7カテゴリーと24のサブカテゴリーに分類できた。サブカテゴリーは、出来る限り学生の言葉を大切にして分類するように心がけた。例えば、プラスイメージの赤りんごの「コミュニケーション」では、「利用者たくさん話せた」「積極的に楽しく話せた」などであり、「利用者からの感謝・励まし」では、「ケアに対する『ありがとう』の言葉」「笑顔・声かけ・自分への気遣いの言葉」などである。

また、マイナスイメージの青りんごの「コミュニケーション」では、「苦手・うまくできない・目が合わせられない」「気持ちに対する言葉かけ」などであり、「介護技術の未熟さ」では、「食事介助」「排泄介助」「声かけ不足」など、学生の素直な言葉で分類した。

表1) りんごカードのカテゴリー分類

	カテゴリー	数	%		カテゴリー	数	%
赤りんご	利用者からの はげまし	76	27.7	青りんご	コミュニケーション	41	22.7
	達成感	61	22.3		利用者への対応	29	16.0
	コミュニケーション	59	21.5		実習環境	28	15.5
	利用者との関係づくり	34	12.4		介護技術の未熟さ	27	14.9
	利用者からの学び	19	6.9		積極的な行動	22	12.2
	職員からの指導・励まし	17	6.2		介護者の視点	18	9.9
	専門職としての自覚	8	2.9		課題と計画性	12	6.6
				健康問題	4	2.2	
	小計	274			181		

(1) マイナスイメージ（青りんご）から見えてきたもの

マイナスイメージを与える要因では、「コミュニケーション」が最も多く、「利用者と話すことが苦手、目が合わせられない」等、基本的対応技術の未熟さや利用者の状態に合わせた言葉かけや配慮不足が多かった。学生は、コミュニケーションの苦手意識と、利用者の特性を踏まえた関わりの難しさを感じていることが伺える。次いで、「利用者への対応」では、個別性を考慮した援助技術の難しさの内容が目立った。「介護技術の未熟さ」には、日常生活援助が上手くできなかった事や「食事介助で利用者がむせてしまった」「利用者の足を踏んでしまった」などヒヤリ・ハット行為に繋がる内容も含まれていた。学生は、介護技術実践への不安を抱きながら実習に臨んでおり、自信に繋がるような技術習得の場としての実習の意味は大きい。

対人援助技術では常にコミュニケーションが基本であり、これらの要因は相互関係にある。教員は学生がコミュニケーションの苦手さを感じながら利用者に対応している状況を考えると、常に利用者の意志確認を行いながら、介護技術実践する重要性を強調し指導することが重要である。最近の学生の傾向として、社会環境の影響による基本的コミュニケーション力の弱さがあるが²⁾、実習が貴重な学びの場となっている。「実習環境」では、「一生懸命やっているのに注意された」「怖くて質問できなかった」等、指導者や職員に対する想いが多く、学生にとってその影響力や存在の大きさを意味している。学生という立場での心理的負担を抱えている内容もあり、学生の立場の弱さがみえる。

「積極的に行動できない」では、必要性は十分認識しているが、「促されないと行動できない、話せない」「どう手を出したらよいか分からない」等思うように行動できない葛藤が伺える。背景には、コミュニケーション力や技術・知識の未熟さからの自信のなさや立場の弱さがあると考えられる。教員は励ましや助言のみでなく、指導者との橋渡しの役割をしながら学生の立場の弱さを伝えていくことも重要で

ある。

「介護者の視点にたてない」では、学生は介護の仕事の大変さや現実直視の中で「辛かった、悲しかった」と受け止める様々な体験をしている。

社会経験の未熟な学生にとって、実習で体験する現実の厳しさは「大変だ」「嫌だ」といった上辺の感情として受け止めやすいが、心の痛みを伴う感情体験は、青年期の学生の成長段階において貴重な体験と言える。³⁾ 教員は常に学生の想いを傾聴し、否定感情を自己の糧として自己受容できるように支えることが大切である。

表2) 青りんごカテゴリー分類

(8カテゴリー、37のサブカテゴリー)

カテゴリー	サブカテゴリー
1 コミュニケーション	① 話すことが苦手・目が合わせられない
	② 利用者の状態に合わせた言葉かけ
	③ 家族との対応・尊重した言葉遣い
2 利用者への対応	① 利用者の個性に合った対応(認知症・麻痺など)
	② レク・暴力行為・複数の利用者対応
3 介護技術の未熟さ	① 日常生活援助の未熟さ(食事・排泄・着脱など)
	② ヒヤリ・ハット(食事・車いす・移乗など)

表3) 青りんごカテゴリー分類(つづき)

(8カテゴリー、37のサブカテゴリー)

カテゴリー	サブカテゴリー
4 実習環境	① 職員に対する思い
	② 施設方針に対する思い
	③ 迷惑をかけている心理負担
5 積極的に行動できない	① 促されないと話せない・行動できない
	② どう手を出したらいいかわからない
6 介護者の視点	① 辛かった・悲しかった(死・現実)
	② 介護職の大変さ(入浴・夜勤)
7 課題と計画性	① コミュニケーション・ケアプラン・記録等
8 健康問題	① 病欠・腰痛・車酔いなど

(2) プラスイメージ（赤りんご）から見えてきたもの

プラスイメージを与える要因では、「利用者から

の感謝・励まし」が最も多く、「ありがとう」の言葉だけでなく、ケアや将来への励まし、学生への思いやりの言葉など利用者が何気なく発する言葉や笑顔に、学生はケアをする立場でいながらエネルギーをもらっている立場も体験し癒されている。

「達成感・体験に対する喜び」では、実習課題や介護技術への自信、利用者の個別性に留意した対応が上手くできた等の内容がみられた。学生は、介護技術の上達や利用者とうまく関わられるかという不安が大きい反面、期待も非常に大きいことが伺える。それ故に「上手くできた」と実感できた喜びは自信となり、実習意欲に繋がる要因となっている。

「コミュニケーション」は、青・赤りんご共に多い割合を示している。「自分のことを名前で呼んでくれた」「覚えていてくれた」「たくさん話せた」等の内容が多かったことは、学生は、利用者と「上手く話せるかどうか」と不安を抱きながら実習に臨んでいることの表れと考える。介護学生として存在を認められ頼られている実感が意欲に繋がっている。「利用者との関係づくり」では、別れの淋しさを挙げている学生が多かった。利用者から頼られたり、スキンシップを通して感じた様々な体験から人間関係を深めることができた喜びを感じている。

「利用者からの学び」では、利用者自身の体験や生活の知恵を伺えたことが、学生にとって新鮮であり、視野を広げることに繋がると思われる。又、利用者の頑張る姿に感動したり、利用者の死などからの深い学びは、普段の生活では得られない体験であり、利用者の存在自体が学生の学びといえる。

「職員からの指導・励まし」は、実習意欲に繋がる大きな要因となる。青りんごの「実習環境」の内容からも、萎縮しがちな学生が、指導者や職員と良い人間関係の中で実習できることは「実習のしやすさ」に大きく影響し、「褒められた、励まされた」といった助言・支持は前向きに臨める要因となっている。指導者には、褒める機会を大切にして、学生の良い部分を伸ばし、自信と意欲に繋げていけるような指導のあり方が求められる。

表4) 赤りんごカテゴリー分類

(7カテゴリー、24のサブカテゴリー)

カテゴリー	サブカテゴリー
1 感謝・励まし	① ケアに対する「ありがとう」の言葉
	② 自分への気遣い(笑顔・励まし)
	③ 将来への励まし(職業人・実習姿勢)
2 達成感 体験の喜び	① 実習課題・介護技術に自信
	② 利用者の状況に応じた対応
3 コミュニケーション	① 名前で呼んでくれた・覚えていてくれた
	② たくさん話せた・積極的に話せた

表5) 赤りんごカテゴリー分類(つづき)

(7カテゴリー、24のサブカテゴリー)

カテゴリー	サブカテゴリー
4 関係づくり	① 別れの淋しさ
	② 頼られた・仲良くなった
	③ スキンシップ(安心感)
5 利用者からの学び	① 利用者の頑張る姿・変化に感動
	② 体験談、生活の知恵、昔の遊び
6 職員からの指導・励まし	① 助言・支持(褒められた・励まし)
	② 実習環境(人間関係・ホッとできる)
	③ 促し・見守り・分かり易い指導
7 専門職の自覚	① 介護の姿勢・責任の重さ・相互作用

(3) 各実習段階別におけるカテゴリー数の傾向から見えてきたもの

本研究の調査対象の学生数が少なく傾向としか言えないが、以下のことが考えられる。

- ① 「コミュニケーション」は、青・赤りんご共に各実習段階で高めに経過している。(図1、図2)

これは学生の関心の高さを示している。導入実習では、利用者との関係づくりどころか「うまく話せるか」ということ自体への不安が十分想像できる。実習経験を積むにつれて、「深い話ができ、心温まった」「多くの利用者と話せるようになった」等、コミュニケーションの意味や捉え方の視点にも変化が見えてきている。

- ② 赤りんごで「達成感・体験に対する喜び」が、

実習段階毎に右上がり経過していることは、介護学生として自覚の芽生えの現れと考えたい。介護過程展開の理解を目標とする第2・第3段階の実習課題は学生にとって大きい、経験の積み重ねと利用者との関係づくりを通して介護専門職としての視点が育っていると考える。「利用者の嬉しそうな表情を見て、改めてこの仕事が好きだと感じた」「成長できた」「介護技術に自信がついた」等の内容も、特に第2・第3段階実習で多かったことからいえる。

- ③ 学生は、介護実習で常にマイナス・プラスイメージの様々な感情体験を通して、段階を経て成長していると考え。今回、分析した青・赤りんごの 카테고리 関連図(図3)から、両面の感情体験の相互関係が見えてきた。

実習における学生の想いは、利用者や指導者・職員の関わり方ひとつでマイナスイメージ(青りんご)にもプラスイメージ(赤りんご)にも揺れ動く。教員は、「学びの場としての実習」の意味と学生の弱い立場を認識し、学生の想いに寄り添い、学生自身が感情体験を自己受容し成長の糧となるようなサポートをすることが重要である。

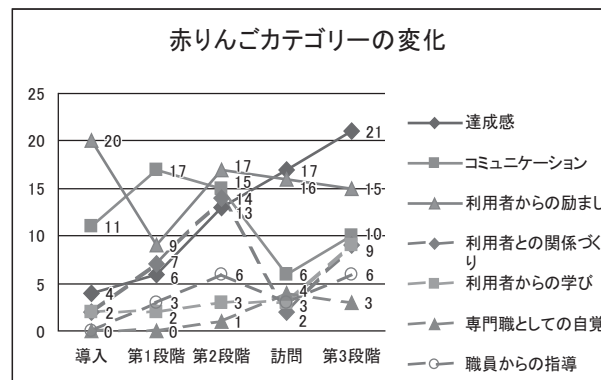


図2 各実習段階別カテゴリー数の傾向(赤りんご)

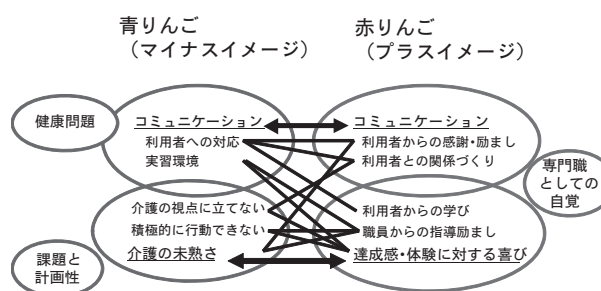


図3 青・赤りんごカテゴリー関連図

5. 結論

- (1) 介護実習におけるマイナスイメージは、8つにカテゴリー化でき、37のサブカテゴリーに分類できた。プラスイメージは、7つにカテゴリー化でき、24のサブカテゴリーに分類できた。
- (2) カテゴリー項目は、青・赤りんご内で相互関係にあり、同時に両方向への相関関係にもある。学生は、常に揺れ動く感情体験を通し段階を経て成長している。
- (3) 「コミュニケーション」「介護技術」における学生の意識は高く、コミュニケーション向上と介護技術習得の場としての介護実習の意味は大きい。
- (4) 実習指導における教員の役割として以下の姿勢が重要である。
 - ① 学生の想いを傾聴し、気持ちに寄り添い学生自身が感情体験を自己受容できるようなサポートをする。
 - ② 「学ぶ場としての介護実習」の意味と学生の

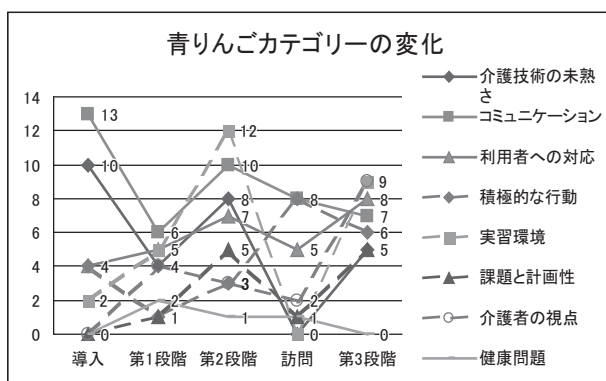


図1 各実習段階別カテゴリー数の傾向(青りんご)

弱い立場をしっかりと受け止める。

- ③ 成長しようとする学生を見守り、実習施設との橋渡しの役割をする。

6. おわりに

「りんごの木」の作成意図は2つある。一つは、クラスメイトとの気持ちを共有でき、「自分ひとりだけが大変なのではない」「ホント大変だったよね」と仲間意識をもつことができ、卒業後の友人関係づくりにもつながることである。二つ目は、個人の成長段階を自分の目で確かめることができることである。介護福祉士は、利用者の「ありがとう」の一言と笑顔に支えられて、最初の一步を踏み出すのは皆同じである。実習現場と教員が両輪の輪となり、学生たちの成長を見守っていきたい。

参考文献

- 1) 尾台安子、山下恵子「介護福祉実習に対する学生の意識と課題」『日本介護福祉教育学会誌』18、2004.
- 2) 中山和子他、「『自分に自信がない』学生の自己成長を促す支援の検討～メンタルヘルスチェックの自己価値観尺度の分析～」、第64回長野県農村医学会発表.
- 3) 中野博子「青年期心理学」人間総合科学大学教材、人間総合科学大学、2004.
- 4) 宗像恒次「感情と行動の大法則」日総研、2008.
- 5) 宗像恒次「SAT療法」金子書房、2006.
- 6) 津田理恵子「実習を受け入れる施設の現状と課題－養成校教員と施設指導者の調査結果から」『日本介護福祉教育学会誌』24(1)、2008.
- 7) 黒沢貞夫『介護福祉士養成新カリキュラム教育方法の手引き』日本介護福祉士養成施設協会、2008.
- 8) 介護福祉士実習指導マニュアル 大阪府介護福祉士会 中央法規出版